



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	逸脱する神：柿本人麻呂「近江荒都歌」についての考察
Author(s)	倉持, しのぶ
Citation	国語国文研究, 160, 1-15
Issue Date	2023-03-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/91669
Type	journal article
File Information	160-1.pdf



逸脱する神

—— 柿本人麻呂「近江荒都歌」についての考察 ——

倉 持　しのぶ

ことに着目し、時間と空間の移動によってたどり着く〈今・ここ〉を描く長歌の構造について考察し、その性質の一端を明らかにする。

二

柿本人麻呂の「近江荒都歌」についてはすでに多くの論考があり、題詞の「過」の問題や、「荒都」を詠むことの新しさ、漢籍の影響など多くの点について論じられてきた。また、長歌の「いかさまに思ほしめせか」の解釈——挽歌的な表現として捉えるかどうか¹——といった点からの論考も多い。さらには、この作品が近江朝をどのような対象として詠んでいるのか——「畏われたもの（「大宮」「大殿」）へつながっていかう²」としているのか、それとも「はつきり」と、『断絶』という事実そのものがそのままモチーフとしてうかがいがつてきている³のか——という点でも様々な説が出されている。

本稿はこれら多くの先行研究の驥尾に付す形で、「天皇の神の命」である天智天皇の遷都が皇統における「逸脱」として詠まれている

近江の荒れたる都に過る時に、柿本朝臣人麻呂が作る歌
玉だすき 畝傍の山の 檣原の ひじりの御代ゆ（或は云ふ「宮
ゆ」） 生れましし 神のことごと つがの木の いや継ぎ継ぎ
に 天の下 知らしめししを（或は云ふ「めしける」） 天にみ
つ 大和を置きて あをによし 奈良山を越え（或は云ふ「そ
らみつ 大和を置き あをによし 奈良山越えて」） いかさま
に 思ほしめせか（或は云ふ「思ほしめか」） 天ぎかる 鄙
にはあれど 石走る 近江の国の 楽浪の 大津の宮に 天の
下 知らしめしけむ 天皇の 神の命の 大宮は ここと聞け
ども 大殿は ここと言へども 春草の 繁く生ひたる 霞立

ち 春日の霧れる（或は云ふ「霞立ち 春日か霧れる 夏草か
しげくなりぬる」） ももしきの 大宮所 見れば悲しも（或は
云ふ「見ればさぶしも」）（巻1・二九）

反歌

楽浪の 志賀の唐崎 幸くあれど 大宮人の 舟待ちかねつ
（二〇）

楽浪の 志賀の（一に云ふ「比良の」）大わだ 淀むとも 昔の
人に またも逢はめやも（一に云ふ「逢はむと思へや」）（二一）

当該作品は人麻呂の作歌活動の初期の作と考えられるが、近江への旅がどのような理由によるのかは題詞や作品内容からは読み取れない。長歌に「或云」の異伝が何か所も見られることや、第二反歌の異伝は「一云」と記されていることから、披露の場が複数回あったことや第二反歌は本来独立した短歌として詠まれていたなどの推測が行われているが、詳細は不明としか言いようがない。本稿では基本的に本文歌を考察の対象とし、歌の詠まれた状況については徒に推測することは控えたいが、長歌という歌体がいわれていること、長歌冒頭での歴代天皇に関する表現などからは、少なくともこの作品が単なる私的な文芸への志向などではなく、公的な要請に基づいて詠まれたものと考ええる。

さて、当該作品の一番の特徴は、長歌の叙述の構造にあると言つてよいであろう。冒頭から「知らしめししを」までで歴代天皇の大和での治世を詠み、「天にみつ」から「天の下 知らしめしけむ」までの部分で天智の遷都を詠み、さらにこれを受ける形で「天皇の

神の命の」以下、近江大津宮の現在の姿を示し、末尾で「見れば悲しも」と（今・ここ）における感懷を述べて結ぶ。途中の「いかさまに 思はしめせか」を挿入句と取るか「天の下 知らしめしけむ」を結びと考えるかは説が分かれるが、どちらにしても二つ目のまともりは「天皇の 神の命」にかかる長い連体修飾句となっている。そして、冒頭の「檀原の ひじりの御代」（神武天皇の時代）から持統朝の現在へと時間が推移するとともに、「大和」から「大津」へと空間も移動しているのである。

この長歌の構造については多くの論があるが、ここでは糸川光樹氏の示唆に富む以下の指摘を引用したい。

ところで二九番長歌を、その内容の時間に注意しつつ眺めてみると、次のような特異な現象に気付くのである。冒頭の「玉櫛畝火の山の檀原の」から読んで行くと、私たちは時間の流れに沿いながら、自然に終末の「大宮処見れば悲しも」に導かれる。ところが逆に終末から時間をさかのぼってたどて行くと、どこかで軌道は途切れてしまい、「玉櫛畝火の山の檀原の」に到達することができないのだ。それはあたかも、途中で落差をつけて重なっている、二段式のすべり台を滑降するようなものがある。⁷

冒頭から読み進めば長歌末尾の（今）にたどり着けるのに、（今）から神武朝に向かって時間をさかのぼることはできない、というこの指摘は、長歌に流れている時間について考える上で重要である。

桑川氏の論では「いかさまに思ほしめせか」を境として、長歌に流れる時間は「歴史的現在（非時間的、不定詞的現実）」から「過去」へと次元が移行していると説く。この落差が、長歌の時間を不可逆なものにしているのである。

もし当該長歌が荒都を眼前にした〈今・ここ〉の時点から詠み始められていたとしたら、こうした現象は起こり得なかつたはずである。言い換えれば、〈今〉は単なる〈今〉ではなく、神武朝から始まり、天智の近江遷都を経てたどり着いたところの〈今〉であり、さらに言えば、そこで行き止まってしまふ〈今〉なのである。

この点を確認する上で有効なのが、当該作品の影響を受けて作られたとされる、山部赤人の「真間の娘子の墓に過る時の歌」である。

古に ありけむ人の 倭文機の 帯解き交へて 廬屋建て 妻
問ひしけむ 勝鹿の 真間の手児名が 奥つ城を こことは聞
けど 真木の葉や 茂りたるらむ 松が根や 遠く久しき 言
のみも 名のみも我は 忘らゆましじ（巻3・四三二）

冒頭からの修飾句を受けた「真間の手児名が 奥つ城」という場所の提示の仕方、そして「こことは聞けど」という表現が、当該長歌を踏まえたものと考えられる。しかし、この作品では、娘子の墓を前にした〈今・ここ〉を起点に、「古にありけむ人」「妻問ひしけむ」と過去のある時点での出来事を推量する形で示すという単純な構造となっている。また、「真木の葉や」以下の四句で当該長歌同様に期待する景（奥つ城）がはっきりと見えないことを歌うが、「言

のみも 名のみも我は 忘らゆましじ」という長歌末尾の表現や、

我也見つ 人にも告げむ 勝鹿の 真間の手児名が 奥つ城所
（巻3・四三二）

という第一反歌の表現から明らかなように、実際に娘子の「奥つ城」を目にすることが叶わなくとも、それを未来に向けて語り継ぐことで讚美しようと詠まれている。当該長歌が「見れば悲しも」と〈今〉にとどまるのとは対照的である。

次に、空間の移動に着目すると、丸山隆氏が伊藤博氏などの先行研究を踏まえつつ、

遷都を道行きとして表現するこのうたから見れば、伊藤の訳を参照するまでもなく、冒頭からの表現は、額田王のうたのように道行くうたい手自身の道行きではないにしても、天智の道行きが歌われていることになる。⁸

とし、当該長歌では、「うたい手」（詠歌主体）が天智天皇と重ね合わされていること、だからこそ「奈良山を越え」鄙の地に入ったところで「いかさまに 思ほしめせか」という「うたい手」の心情が詠まれていることを説く。丸山論は詠歌主体（丸山論では「うたい手」と遷都の主体である天智という「道行きの主体の二重化」が行われていることを指摘しており、この作品が〈ここ〉である大津の荒都から詠まれ始めるのではなく、「道行き」によってたどり着いた

地点として〈ここ〉（＝近江荒都）を詠むものであることを明確に指摘している。

その〈今・ここ〉では、「春草の 繁く生ひたる 霞立ち 春日の霧れる」と自然だけが描写される。天智の遷都をなぞるようにして〈今・ここ〉にたどり着いた詠歌主体には、天智が目にしたのと同じ「大宮」「大殿」を見ることが期待されていたであろう。しかし、それは見ることの叶わない、いわば〈不在の景〉なのである。

この点については、月岡道晴氏が、

つまり此歌は、時間軸の視点からも空間軸の視点からも、二重に期待が裏切られた果てに到り着いた地の空しさを示す構成で詠まれていることになる。

と指摘されている通りであろう。

また、当該作品の題詞には「近江荒都」とあるが、歌の中にはその荒廃は直接詠まれることはない。当該作品同様、遷都後の都の荒廃を詠んだ田辺福麻呂の「奈良の故郷を悲しびて作る歌」（巻6・一〇四七～一〇四九）や「三香原の荒墟を悲傷して作る歌」（巻6・一〇五九～一〇六一）では、

…さすだけの 大宮人の 踏み平し 通ひし道は 馬も行かず
人も行かねば 荒れにけるかも（巻6・一〇四七）
…ありが欲し 住み良き里の 荒るらく惜しも（巻6・一〇五九）

などと、旧都が荒れたことを表現する。当該作品でそうした大津宮の現状を一切ささず、その「不在」だけが示されている点に注目すべきであろう。

すなわち当該作品は、荒廃したかつての都を詠むことではなく、期待した都が存在しないという、その衝撃を示すことに中心が置かれているのである。そしてその衝撃は、天智による遷都と同じ道筋をたどることによって、天智が宮んだ壮麗な都を期待していた詠歌主体にとって、期待とは乖離した現実を目の当たりにするという形で示されている。

このような構造を持つ当該長歌において、従来問題となってきたのが「いかさまに 思ほしめせか」の解釈である。「都ヲ遷シ給フ事ヲ少謗レルカ」という解釈に代表されるように、天智の遷都を否定的に捉えたり、ひいては遷都そのものを大津宮の荒廃の原因としたりする論も多い。その点を明快に述べているのが次に引用する伊藤博氏の論である。

「いかさまに思ほしめせか」は、こんな天離る夷の地に都を遷さなかったならばかかる運命におちいりはしなかっただろうに、いかに思し召されて遷都などされたのか」という感慨をこめた表現であって、いわば、敬慕愛着の情がありあまって痛恨¹¹ 嗟嘆の声となったものである。

伊藤氏は「いかさまに 思ほしめせか」を挽歌的な表現と見て、死者への「くどき文句」と同様に捉える立場から論じている。

また、曾田友紀子氏は長歌冒頭の皇統譜の表現に着目し、次にように論じる。

すなわち、歴代天皇が宮都を置き続けた大和から奈良山を越えて畿外に都を移したこと、祝福された大和の地から離れた別の地に遷都したことは、皇統譜に連なる天皇に許される行為ではなかった。だからこそ、一時の栄華はあつてもやがては滅び、廢墟となる運命をたどるのは必然であつた¹²。

曾田氏も指摘するように、長歌冒頭では実際の歴史事実に対し、神武以来の歴代天皇が大和に都を置いていたと歌い出すが、このような表現は都を畿外、「天さかる鄙」の地に置いた天智の行為を「逸脱」として印象付けるものである。しかし、曾田氏が言うように、この「逸脱」こそが近江大津宮が荒都となった原因として詠まれているという指摘には俄かには同意できない。

その理由の一つが、上に述べたこの長歌の時間・空間にかかわる構造である。曾田氏は長歌に詠まれた時間に着目して、

長歌前半では天智の皇位継承の正当性を保証し、道行形式によりその天皇が畿内を離れて選んだ近江の都に祝意をあらわす。そして、大宮、大殿は確かに出現した。しかし、今現在はいくう順序で、遠い過去から近い過去である近江朝、最後に持統朝の現在を、

皇統譜 ↓ 神の尊（天智） ↓ 大和から近江への都移

り ↓ 大宮・大殿 ↓ 現在の荒都の姿

このような時間軸に沿って、近江朝の荒廢は宮都の伝統から逸脱し、遷都した天智には免れることのできない帰結として描かれている。

と論じる。しかし、先に確認したように、当該長歌は冒頭から読み進めていくことはできても、〈今・ここ〉から遡ることを拒む構造となっている。そして、〈今・ここ〉の荒廢を直接詠むことなく、かつて「確かに出現した」大宮や大殿の不在という形で示し、皇統譜に連なる「天皇の神の命」として天智を描くのである。結果として近江大津宮は短命のうちに荒都となるが、「天皇の神の命」の行為としての遷都が必然的にそれをもたらしたのだと詠んでいると捉えるのはどうであろうか。

まず、天智が遷都した近江大津宮は、冒頭の「玉だすき 畝傍の山の 檀原の ひじりの御代」¹³（異伝では「宮」と対応する形で「石走る 近江の国の 楽浪の 大津の宮」と詠まれ、枕詞を用いて讚美されていることに注目すべきであろう。「天さかる鄙」ではあつても、しかるべき場所を選んで天智による遷都は行われたのである。

次に、曾田氏も指摘しているように、当該長歌において天智は「皇統譜に連なる」存在として、「天皇の神の命」と表現されている。人麻呂作品における「天皇神格化表現」については神野志隆光氏に詳しい論考があり、「スメロキ」は崩御した「オホキミ」を神格化する表現と位置付けられる。天智は神格化された存在として詠まれているのである。

天智を「天皇の神の命」と表現することについては遠山一郎氏に詳しい考察がある。遠山氏は津田左右吉氏の論を援用して「ミコト」が対象を人として扱う語であることに着目し、天智が単に「神」とされずに「ミコト」を伴う理由を、

天智天皇はミコトを伴うことによって、津田論文の指摘する人の側面を残すけれど、同時に、渡辺護「兄の感傷」(『万葉挽歌の世界』所収)が指摘するように、ミコトが死者に対してすぐには用いられず、この世の存在ではないことの確認後に添えられることを、見落とすわけにゆかない。天智天皇を遠い時代の神々の側へ寄せる作者の意図が、ミコトに込められていることを、見て取る必要があるだろう。

としたうえで、「いかさまに 思ほしめせか」という二句が「人の側面を払拭しきれない」天智天皇の行動に対して、「天皇の思慮へ人が立ちいることを避ける表現」であるとする。

ここで人麻呂作品における天皇神格化表現そのものについて詳しく論じる用意はないが、神話的存在として語られる天武(日並皇子挽歌)「高市皇子挽歌」、現身の「神」として讃えられる持統(吉野讃歌)と比較したとき、崩御によって神(スメロキ)の側に入りながら人としての側面を残す天智という捉え方は非常に示唆に富むものである。遠山氏は「近江荒都歌の基底には、巻二に収められた天智天皇挽歌群」の存在があり、¹⁵ 女たちの「人である天智に向けた嘆き」を当該作品が承けつつ、

天智天皇を人から神へ転じさせようとする際、直接にカミと呼ぶことの困難が、ミコトを添加する形に現われたのではないかと考えられる。

とする。そして、「女たちの嘆きに包まれて生な生ましく人であった天智天皇」を「神に昇華させる」ために、反歌も含めて周到な配慮がなされていることを論じる。遠山氏の指摘するように天智を「神」として定位しようとする意志をそこに読み取るのであれば、「神」である天智の行為は否定的な評価を与えられているとは考え難いのではないだろうか。

また、従来の研究では、「いかさまに 思ほしめせか」という語句が挽歌に用いられていることからこの作品に挽歌的性格を見る論が多い。確かにこの句は挽歌に用いられており、類似の表現も含めると以下のような用例がある。

：いかさまに 思ほしめせか 神風の 伊勢の国は 沖つ藻も
なみたる波に 塩気のみ かをれる国に うまこり あやにと
もしき 高照らす 日の皇子(巻2・一六二)

：いかさまに 思ほしめせか つれもなき 真弓の岡に 宮
柱 太敷きいまし みあらかを 高知りまして 朝言に 御
言問はさず 日月の まねくなりぬれ そこ故に 皇子の宮人
行くへ知らずも(一に云ふ「さすだけの 皇子の宮人 行くへ
知らにす」)(巻2・一六七)

：いかさまに 思ひ居れか 栲縄の 長き命を 露こそば 朝

に置いて 夕には 消ゆといへ 霧こそば 夕に立ちて 朝には 失すといへ …時ならず 過ぎにし児らが 朝露のごと 夕霧のごと (巻2・二一七)

…いかさまに 思ひいませか うつせみの 惜しきこの世を 露霜の 置きて去にけむ 時にあらずして (巻3・四四三)

…いかさまに 思ひけめかも つれもなき 佐保の山辺に 泣く子なす 慕ひ来まして したたへの 家をも造り あら たまの 年の緒長く 住まひつつ いましものを… (巻3・四六〇)

磯城島の 大和の国に いかさまに 思ほしめせか つれもなき 城上の宮に 大殿を 仕へ奉りて 殿隠り 隠りいませ ば… (巻13・三三二六)

このうち、尼理願の死を詠んだ四六〇番歌で理願が佐保の地に居を構えたことに對して用いられている以外は、亡くなった人物に對してその死を「くどく」形で用いられており、特に殯宮挽歌である一六七番歌と三三二六番歌で、その殯宮の営まれた地を「つれもなき」と表現していることは先行研究でも指摘されているとおりである。

それらの表現に比べた時、当該長歌の「いかさまに 思ほしめせか」の後にも「天ざる鄙」の地である大津に宮を営んだことが詠まれており、その類似を指摘するものも多い¹⁶。しかし、当該長歌では「天ざる 鄙にはあれど」と逆接で続け、しかも先に確認したように「石走る 近江の国の 楽浪の 大津の宮」と枕詞を用いて

土地を讚美しており、挽歌における「くどき」とは同様に扱うことはできない。むしろ、当該表現は「尼理願挽歌」における理願が、縁もゆかりもない佐保の地を選んで居住したことをいぶかしむ表現に近いと捉えるべきなのではないだろうか。

その尼理願挽歌では、理願が佐保の地に居住したことはいぶかしむ対象ではあっても、それ自身が理願の死の原因になっているわけではない。佐保の地を敢えて選んでやって来たという、理願の思いもよらない行為（通常ではない「逸脱」）に對して「いかさまに 思ひけめかも」といぶかしさを表明しているだけである。当該長歌においても、「いかさまに 思ほしめせか」は天智による遷都を、思いもよらない行為「逸脱」として受け止めた表現として、まずは押さえるべきであろう。

「天ざる鄙」に都を置くことは、大和に都を置いてきた（とされる）神武以来の歴代天皇に對して、天智による明らかな「逸脱」である。しかし、「天皇の神の命」による遷都は、それなりの地を選んでのものであり、そこに一時的にはせよ壮麗な宮が出現したのである。その意味で、この「逸脱」こそが「天皇の神の命」の偉大な事業を可能にしたのだとも言えよう。

先にも確認したように、当該長歌は荒廃したかつての都を詠むことではなく、期待した都が存在しないという、その衝撃を示すことに中心が置かれている。そしてその衝撃は、神武以来の歴代天皇は成し得なかった畿外への遷都を敢行した天智と同じ道筋をたどることによって、天智が営んだ壮麗な都を期待していた詠歌主体にとつて、期待とは乖離した現実を目の当たりにするという形で示されて

いるのである。

歴史的事実としては、近江大津宮は短命のうちに滅びてしまったのであり、当該長歌は滅びてしまった都へ向けての出立を詠んでいる。しかし、天皇の「道行き」をたどり直す詠歌主体が期待したのは、かつては確かに存在した「天皇の 神の命の 大宮」を目にすることであつたはずである。それが存在しない、という衝撃を詠むことに中心があるのであって、遷都によって大津宮が滅んだのだと嘆いたり、遷都を非難したりしているわけではないだろう。

むしろ、天智による遷都は華々しい栄光に向かつての出立であつたからこそ、同じ道をたどつてもそこにたどり着けないことの衝撃が大きくなると考えるべきではないだろうか。

三

万葉集中で遷都に関する歌は大きく三つに分けられる。

一つは遷都そのものを詠んだもので、額田王の「下近江国時作歌」(巻1・177-18)、藤原京から平城京に遷都した際の歌(巻1・七八、七九-八〇)が挙げられる。

額田王、近江国に下る時に作る歌、井戸王の即ち和ふる歌
うまさけ 三輪の山 あをによし 奈良の山の 山のまに い
隠るまで 道の隈 い積もるまでに つばらにも 見つつ行か
むを しばしばも 見放けむ山を 心なく 雲の 隠さふべし
(巻1・177)

反歌

三輪山を 然も隠すか 雲だにも 心あらなも 隠さふべしや
(二八)

二つ目としては、新都を讃美する歌であり、藤原京を讃えた「藤原宮御井歌」(巻1・五二-五三)、田辺福麻呂が恭仁京を讃えた「讀久迓新京歌二首」(巻6・一〇五〇-一〇五八)の他、遷都に伴う宮の造営を詠んだ「藤原宮之役民作歌」(巻1・五〇)もこの中に含めてよいであろう。

藤原宮の御井の歌

やすみしし わご大君 高照らす 日の皇子 荒たへの 藤井
が原に 大御門 始めたまひて 埴安の 堤の上に あり立た
し 見したまへば 大和の 青香具山は 日の経の 大き御門
に 春山と しみさび立てり 畝傍の この瑞山は 日の緯の
大き御門に 瑞山と 山さびいます 耳梨の 青菅山は 背面
の 大き御門に 宜しなへ 神さび立てり 名ぐはしき 吉野
の山は 影面の 大き御門ゆ 雲居にそ 遠くありける 高知
るや 天の御蔭 天知るや 日の御陰の 水こそば 常にあら
め 御井の清水 (巻1・五二)

短歌

藤原の 大宮仕へ 生れつくや 娘子がともは ともしきろか
も (五三)

三つ目としては、旧都を懐かしむ歌、旧都の荒廢を嘆く歌で、藤原宮遷都後の志貴皇子の歌（巻1・五）や、山部赤人の「登神岳歌」（巻3・三三四～三三五）、福麻呂が平城京と恭仁京の荒廢を詠んだ荒都歌（巻6・一〇四七～一〇四九、一〇五九～一〇六一）などがある。

采女の 袖吹き返す 明日香風 都を遠み いたづらに吹く
（巻1・五一）

当該作品は「荒都歌」という主題からは三つ目のグループに分類されるが、「道行き」の形で詠まれている点では遷都を詠んだ一つ目のグループに近いことがわかる。だが、額田王の歌が三輪山を振り返りつつ、いわば旧都に心を残したまま新都へと進むのに対し、当該長歌は文字通り振り返ることなく近江の地を目指していくことが詠まれる。

このように、天皇の移動を中心に詠む歌について類例を考えるには、多くの先行研究で指摘されている「道行き」の歌が参考となる。

そらみつ 大和の国 あをによし 奈良山越えて 山背の管
木の原 ちはやぶる 宇治の渡り 岡屋の 阿後尼の原を 千
年に 欠くることなく 万代に あり通はむと 山科の 石田
の社の 皇神に 幣取り向けて 我は越え行く 逢坂山を（巻
13・三三三六）

他にも同じ巻十三の三三三〇番歌、三三三七番歌、三三三四番歌などがあるが、いずれも大和を出発地として道中の地名が列挙される。三三三六番歌の場合、「奈良山越えて」とあるところが、畿外への旅を示す点で当該長歌と重なる。

こうした「道行き」表現は記紀歌謡にも見られ、伝統に根ざしたものと考えられるが、当該長歌に即して考えると、そこには新たな要素を指摘することができる。それはこの「道行き」が「大和を置きて」と歌われることである。

万葉集中には、ある土地を後にして別の地に行く場合に「置く」と表現する例として次のようなものがある。

やすみしし 我が大君 高照らす 日の皇子 神ながら 神さ
びせすと 太敷かす 都を置きて こもりくの 泊瀬の山は
真木立つ 荒き山路を 岩が根 禁樹押しなべ 坂鳥の 朝越
えまして 玉かざる 夕さり来れば み雪降る 安騎の大野に
はたすすき 小竹を押しなべ 草枕 旅宿りせず 古思ひて
（巻1・四五）

飛ぶ鳥の 明日香の里を 置きて 去なば 君があたりは 見
えずかもあらむ（二に云ふ）君があたりを 見ずてもあらむ（
巻1・七八）

大君の 命恐みに きびにし 家を置き こもりくの 泊瀬
の川に 舟浮けて 我が行く川の 川隈の 八十隈落ちず 万
度 かへり見しつ 玉梓の 道行き暮らし あをによし 奈
良の都の 佐保川に い行き至りて 我が寝たる 衣の上ゆ

朝月夜 さやかに見れば たへのほに 夜の霜降り 岩床と
川の氷凝り 寒き夜を 息むことなく 通ひつつ 作れる家に
千代までに いませ大君よ 我も通はむ(巻1・七九)
ひさかたの 都を置きて 草枕 旅行く君を いつとか待た
む(巻13・三二五二)

これらの「置く」は、『時代別国語大辞典 上代編』で、「④残して置く。後に留め置く。」と説明される用例に当たすが、当該長歌については『釈注』が「置き去りにする意」と説明しているように、あえて他の土地へと移動する様を詠んでいると考えられる。他の用例においても、七八・七九番歌は藤原京から平城京への遷都の歌であり、旧都を「置き去りにする」という点で当該歌と状況的に重なるものである。四五番歌と三二五二番歌は都を後にしての旅を表すが、特に四五番歌は人麻呂による輕皇子の「安騎野遊獵歌」であるため、当該長歌の表現を考える上で参考となるであろう。

この四五番歌については『釈注』は、

大切で立派な都さえもとに捨てて行くのにはわけがあることをにおわす。この歌の趣旨を強化する伏線が秘められていることに注意。

としているが、その説明にあたるのが、

「都」を離れて難儀な「旅」の宿りをするのは「いにしへ思ふ」

一事に出るものだといふのである。(中略) 神の御子たるものが本拠の都をあとにして旅寝しなければならぬほどに安騎野での懐古は事重大であることをにおわした長歌の伏線が、その夜の寝苦しさに視線をあてることで、焦点をあらわしはじめる。(中略) (こ)ではじめて、「いにしへ思ふ」の内実について種明かしがなされる。

という箇所であろう。都を「置きて」の旅が「懐古」という目的のために意図的に行われたことを示しているのである。

三二五二番歌はともかく、当該長歌を含めた遷都を詠んだ三例において、「置く」という表現が用いられていることに対しても、四五番歌同様に重く受け止めるべきではないだろうか。都を遷すということは、それだけで重大な行為であるが、当該長歌ではそれが神武以来の歴代天皇が都を営んできた「大和」であることを、「知らしめししを」と逆接で提示しており、そのような由緒ある場所を後にするということが、いかに「逸脱」した行為であるのか、それを印象付けるのが「大和を置きて」であつたと思われる。天智による遷都は、意図的・主体的な行為として詠まれているのである。

ところで、天皇が都を「置きて」他所へ移動する状況として、遷都以外に行幸が考えられる。遷都と行幸はもとより異なる行為ではあるが、統治の中心主体である天皇が、統治の中心地である都を後にして別の地へと移動するという点では共通する性質を持つ。そして、行幸先に行宮を造ることで、文字通り「都」が出現すると詠まれる例もある。

おし照る 難波の国は 葦垣の 古りにし里と 人皆の 思ひ
やすみて つれもなく ありし間に 続麻なす 長柄の宮に
真木柱 太高敷きて 食す国を 治めたまへば 沖つ鳥 味経
の原に もののふの 八十伴の緒は 廬りして 都なしたり
旅にはあれども (巻6・九二八)

荒野らに 里はあれども 大君の 敷きます時は 都となりぬ
(九二九)

笠金村の神亀二年の難波宮行幸徒駕歌であるが、天皇の行幸により、「葦垣の 古りにし里」が「都」へと変貌する様が詠まれている¹⁷。
難波は仁徳天皇や孝徳天皇の都も置かれた地であったが、金村の歌が詠まれた神亀二年の行幸時には、「古りにし里」となっていたらしい。そのことは、翌神亀三年に「知造難波宮事」に任命された藤原字合が、

昔こそ 難波ゐなかと 言はれけめ 今は都引き 都びにけり
(巻3・三二二)

と詠んでいることから確認できる。

「古りにし里」が「都」となったと詠まれる金村歌がしばしば比較されるのが、「壬申年之乱平定以後歌二首」の題詞を持つ次の歌である。

大君は 神にしませば 赤駒の 腹這ふ田居を 都と成しつ

(巻19・四二六〇)

大君は 神にしませば 水鳥の すだく水沼を 都と成しつ
(四二六一)

天皇の偉大さを詠むにあたり、「赤駒の腹這ふ田居」「水鳥のすだく水沼」を「都と成し」と歌うこれらの例も合わせて考えると、当該長歌で「都を置きて」、「天さかる鄙」の地に宮を営んだ天智の試みは、賞讃される結末を迎えることが期待される、前例のない「逸脱」であったのではないだろうか。

だから歴代天皇の成しえなかつた畿外への遷都の敢行が詠まれ、その遷都と同様の道をたどって大津の地へとたどり着いた詠歌主体が、「天皇の 神の命の 大宮は … 大殿は」と歌うとき、そこには華々しい都の姿が期待されていたはずである。それが「現実の景のむこうに、なかば幻視されるものとして提示されている」¹⁸からこそ、不在である(今・ここ)の現実との落差が際立つのであると言えよう。

四

当該長歌の構造について考察をしてきたが、長歌末尾で(今・ここ)の現実を効果的に示すために、当該長歌には周到な計算に基づいた表現が用いられていることが確認できたものと思う。

人麻呂長歌のこうした手法として、当該作品と類似性を指摘できるのが「石中死人歌」(巻2・二二〇)である。

玉藻よし 讃岐の国は 国からか 見れども飽かぬ 神からか
ここだ貴き 天地 日月と共に 足り行かむ 神の御面と 継
ぎ来る 中の湊ゆ 舟浮けて 我が漕ぎ来れば 時つ風 雲居
に吹くに 沖見れば とゐ波立ち 辺を見れば 白波騒ぐ い
さなとり 海を恐み 行く舟の 梶引き折りて をちこちの
島は多けど 名ぐはし 狭岑の島の 荒磯面に 廬りて見れば
波の音の 繁き浜辺を しきたへの 枕になして 荒床に こ
ろ伏す君が 家知らば 行きても告げむ 妻知らば 来も問は
ましを 玉梓の 道だに知らず おほほしく 待ちか恋ふらむ
愛しき妻らは (巻2・二二〇)

讃岐を讃美する表現から始まり、詠歌主体が「中の湊」を船出し、「時つ風」による波のために「狭岑の島」に退避するという、移動の様が詠まれていく。その移動の過程が島で見かけた死者である「荒床に ころ伏す君」とおそらく同じものであることは、当該長歌における詠歌主体と遷都を敢行した天智の道行が同じものであることと重なる。また、「狭岑の島」は「名ぐはし」と讃美される対象であり、その点でも当該長歌の「大津」と同様である。

もちろん、「石中死人歌」における土地への讃美表現は羈旅信仰と結びつくものであり、遷都した土地を讃える当該作品とは性質が異なるが、神話的な起源を歌われる地と、「天皇の 神の命」によって選び取られた場所という点で、どちらも豊穡や繁栄を予想させる表現である。

だが、「石中死人歌」において、讃美される場所へと移動してたど

り着いた先の〈今・ここ〉で、詠歌主体が出会うのは荒磯に横たわる横死者であり、それは本来期待されていたものとは乖離した現実である。この期待されていたことと結果との乖離もまた、当該長歌における荒都を前にした詠歌主体の体験と重なるであろう。なお、「時つ風 雲居に吹くに」以下の風や波の叙述に、長歌冒頭の讃美表現からは一転した、不穏で不吉な表現を見るのであれば、当該長歌の「いかさまに 思ほしめせか」という詠歌主体による遷都への思いの吐露も、荒都という現実と響き合う形で伏線となつているとも考えられる。しかし、先に確認したように、当該長歌の「いかさまに 思ほしめせか」は天智の遷都を「逸脱」として受け止めた詠歌主体の思いであり、この表現を挽歌的なものとしなくても、天智の大胆な行爲に対する「得体のしれない不安、懼れがこめられている」と押さえるだけで十分であろう。

「石中死人歌」と当該作品が、主体の移動とその結果として期待を裏切られるという共通点を持つ一方、両者には大きく異なる要素も指摘することができる。それは、〈今・ここ〉へと移動してくる詠歌主体と、その詠歌主体と同じように移動したもの——「石中死人歌」では行路死人、当該長歌では遷都の主体たる天智——との関係である。

前者において、詠歌主体は行路死人と自らとを重ね合わせ、同じ境遇に陥ったかもしれない相手として、いわば自身のあり得たかもしれない姿として、死者を身近に捉え、その「家」や「妻」との関係で死者を悼む。そして、行路死人が旅路の果てにたどり着いた〈今・ここ〉と詠歌主体がその死者を見る〈今・ここ〉は眼前の死者

の存在を通して重なる時空間となる。

それに対して、当該長歌では、詠歌主体は決して天智に自身を重ねることはない。天智はあくまでも「天皇の 神の命」であり、その行為は測り難い「逸脱」である。同じように時間・空間を移動してきても、詠歌主体にとつての〈今・ここ〉と、遷都を敢行した天智が大津に都を置いた時点としての〈今・ここ〉は、「大宮」「大殿」の不在によって決して重なることはない。天智がたどり着いたであろう〈今・ここ〉は「現実の景のむこう」²⁰に、かつては確かに存在したのであるが、詠歌主体にはそれを見ることは叶わないのである。

すなわち、当該長歌において、近江大津宮は決してたどり着くことのできない場所として、時間の向こうに押しやられているのだと言える。

だから、長歌末尾で「大宮所 見れば悲しも」と詠まれるのであるが、反歌二首では「大宮人の 舟待ちかねつ」(三〇)、「昔の人にまとも逢はめやも」(三一)と、もう決まっていたの景が戻らないことが表現されるのである。長歌末尾の「悲しも」については、岩下武彦氏が大野晋氏の論に依りつつ、「悲し」の語源を「かね」(力及ばない)として、異伝の「さぶし」との違いについて「どうしようもない現実が、より強く前面に押し出されて来る」と論じているのが参考となる。第一反歌における「舟待ちかねつ」も同様に「かね」ているのであり、第二反歌では反語を用いて「昔の人」に逢うことが決まていないことを歌う。近江大津宮の繁栄は、取り戻すことのできない過去として提示されているのである。

五

以上、人麻呂の「近江荒都歌」について、長歌の構造を中心に考察してきた。当該長歌は荒都を前にした〈今・ここ〉から歌うのではなく、「天皇の神の命」である天智の遷都の道行きをなぞる形でたどり着いた〈今・ここ〉として提示する。そして、長歌冒頭からの歴代天皇が都を宮んだ大和を置いて近江へと都を遷すという天智の「逸脱」の結果、かつては確かに存在した「大宮」「大殿」が〈今・ここ〉には不在であるという、詠歌主体の期待とは乖離した現実が衝撃を持って受け止められる。

神武以来の歴代天皇の成しえなかった畿外への遷都は非難されるべき行為ではなく、栄光に向けての華々しい出立だったのであり、その結果かつて確かに壮麗な大津宮は存在したのである。しかし、当該作品が詠まれたと考えられる持統朝の現在において、詠歌主体は決してその栄華の場所へたどり着くことはできない。すなわち、持統朝の人々にとつて決してたどり着くことのできない存在として近江大津宮は詠まれているのである。

かつて確かに存在したものが、今現在は存在しない——挽歌がそうした喪失の悲しみを詠むものであるとしたら、確かに当該作品には挽歌的要素があるであろう。しかし、挽歌における「逢えない嘆き」という要素以上に、当該作品には〈逸脱する神〉としての天智の偉業を讃えつつ、すでにそれが過去へと押しやられたことを宣言するという面を指摘できるのではないだろうか。

天智を《逸脱する神》》として讀えつつ、その偉業がすでに過去のものであることをはっきりと示したのがこの作品だったのである。その意味で当該作品は「持統朝の宮廷歌人」として活躍することになる人麻呂の出発点²³として、実にふさわしいものであったと言える。

注

- 1 「近江荒都歌」を挽歌として論じる代表は伊藤博『近江荒都歌の文学史的意義』（『万葉集の歌人と作品』上 一九七五年 塙書房 初出一九六五年一月・四月）である
- 2 神野志隆光『近江荒都歌論』（『柿本人麻呂研究』一九九二年 塙書房 初出一九七六年）
- 3 身崎壽『近江荒都歌』（『人麻呂の方法』二〇〇五年 北海道大学図書刊行会 初出一九九六年七月）
- 4 神野志氏前掲論文
- 5 伊藤氏前掲論文他
- 6 毛利正守「人麻呂の皇統意識——近江荒都歌と日並皇子挽歌、それ以前を視野に入れて——」（『上代文学』八七 二〇〇一年十一月）では、異伝は挿入句、本文歌は「天の下知らしめしけむ」に係ると取る
- 7 糸川光樹「試論・人麻呂の時間」（『論集上代文学』四 一九七三年 笠間書院）
- 8 丸山隆司「近江荒都歌」（『セミナー万葉の歌人と作品』二一

- 九九九年 和泉書院）
- 9 月岡道晴「近江荒都歌の構造と視点——『いかさまに思ほしめせか』と『諸しこそ——』（『美夫君志』九一 二〇一五年十一月）
- 10 契沖『代匠記（精撰本）』
- 11 伊藤氏前掲論文
- 12 曾田友紀子「柿本人麻呂『近江荒都歌』における道行き」（『長野工業高等専門学校紀要四三 二〇〇九年六月』）
- 13 神野志隆光「天皇神格化表現をめぐって」（『柿本人麻呂研究』一九九二年 塙書房 初出一九九〇年）
- 14 遠山一郎「近江荒都歌における天皇の神格化」（『天皇神話の形成と万葉集』一九九八年 塙書房 初出一九八七年二月）
- 15 当該作品の反歌第一首に天智挽歌群一五二番歌の影響を指摘する論は『万葉考』など多数ある
- 16 伊藤氏前掲論文等
- 17 拙稿『都なしたり 旅にはあれども——笠金村「神亀二年の難波宮行幸歌」についての考察——』（『国語国文研究』一三六 二〇〇九年七月）
- 18 身崎氏前掲論文
- 19 杉山康彦「人麿における詩の原理——人麿ノート その一——」（『日本文学』六一〇 一九五七年十月）
- 20 身崎氏前掲論文
- 21 大野晋『日本語の年輪』（一九六六年 新潮社）
- 22 岩下武彦「近江荒都論——人麻呂の方法——」（『日本文学』二七一二

一九七八年二月

23

人麻呂作品の制作年次としては、当該作品と「日並皇子殯宮挽歌」(巻2・一六七〜一七〇)の先後関係をめぐっては諸説あり、決定は難しいが、当該作品が人麻呂の「宮廷歌人」としての最初期に位置づけられる点は動かない

*『万葉集』の引用は『CD-ROM版万葉集』(塙書房)により、適宜私に改めた

(くらもち し の ぶ・旭川工業高等専門学校教授)